

新刊紹介

山田昌弘著

『パラサイト社会のゆくえ』

難波江 和 英

この本は、同じ著者が1999年に出版した『パラサイト・シングル時代』（ちくま新書）の続編である。焦点になっているのは、パラサイト・シングル（学校を卒業しても、親と同居して生活の基本条件を依存し、リッチな生活を楽しむ独身者）のその後。前著の刊行から5年を経て、パラサイト・シングルの生活は変化したのか、しなかったのか。いやそればかりではない。パラサイト・シングルの今後、つまり、かれらはこれから、はたしてどのような生活を送ることになるのか。そしてまた、パラサイト・シングルを再生産しつづける日本社会の「ゆくえ」は？

ただしこれは「予言の書」ではない。パラサイト・シングルの問題を種々のデータをふまえて解きあかしながら、かなり高い確率で起こる「現実」を考えさせる読みもの、それがこの本のセールス・ポイントである。そこから導かれる結論は、ひと言でいえば、パラサイト・シングルのお先は真っ暗。それはなぜか。その最大の理由は、まったくなんのデータがなくても、経験則だけでわかる。つまり、人間はだれでも年を取るから。

さきゆきは「どうにかなる」と思えるのは、若くて（一説では35歳未満）健康なうち。パラサイト・シングルの中高年化は、著者も指摘しているとおおり、やはり問題だろう。病気や老化は、親に寄生している自分ばかりでなく、もっと深刻なことに、宿主の親にもしのびよるからである。「いつか結婚するから」と思って、キャリアも積まず、スキルも身につけず、生活設計も立ててこな

かったパラサイト・シングルは、人材の選別がきびしくなった昨今、よほどの資産でもないかぎり、自分と親の生活・老後・介護をひとりで細々と背負う可能性が高くなる。

特にパラサイト・シングルの男性は、いまでも「家計を支えるのは男」という意識が強い日本社会では、結婚相手も見つかりにくいだろう。他方、親と同居しているパラサイト・シングルの女性も、安閑としてはられない。企業では正社員の数は激減し、それにつれて派遣社員の数が激増している。結婚して専業主婦かパート・タイマーになりたいと願っても、安定した収入を得ている独身男性の数が減っているのだから、それも以前ほど簡単には実現しなくなった。ましてや、パラサイト・シングル時代の生活水準をキープできる結婚となれば、ほとんど不可能に近い（だから日本では、結婚後も「親がかり」の隠れパラサイトが数多く存在している）。「結婚＝永久就職」は、すでに遠い昔の夢である。むしろ、年金制度における男女格差（本書の22章～24章）でも勉強して、「結婚＝離婚を仮定した親しいおつきあい」くらいに考えておいたほうが、身のためかもしれない。

こうした背景には、日本社会の不安定化、特に雇用形態をふくめた経済の構造転換、およびそれにとまなう家族形態の変化がある。パラサイト・シングルが「リッチな生活」を送れたのは、社会状況がもっと安定して、将来の生活の予測がついたころのことにすぎない。著者のこの見解は、おそらく正しいだろう。これからの日本社会にとって最大の問題は、「『将来の生活形態』が予測不可能になっている」ということが確実に予測可能になった点にある。しかしもしこれがパラサイト・シングルの「ゆくえ」から浮かびあがったレッスンであるとすれば、そこには（逆説的にではあるけれど）ひと筋の光明が射しているともいえる。なぜなら、これでようやく、バブルの焼け跡を尻目に、こつこつと努力して、地道に仕事にはげむことがまともに評価される社会環境が整いはじめたからである。世のなか捨てたものではない。

（ちくま新書、2004年、187頁、本体価格680円＋税）